

研究発表

研究発表 (1)

ハルトマンからヴォルフラムへ——13世紀初頭ドイツにおける翻案と詩作——

松原 文 (立教大学助教)

ハルトマン・フォン・アウエの『エーレク』は、周知のとおりドイツ語に翻案された最初のアーサー王物語であり、このジャンルを担った次の世代のヴォルフラムやゴットフリート、さらにその後続いた長大な散文作品の作者達の道標となった作品である。『イーヴァイン』が原典にかなり忠実に従っているのに比べ、『エーレク』は(16世紀のアンブラス写本が唯一のほぼ完全な写本という伝承状況の劣悪さを差し引いても)主写本と目されるクレティアンの原典から逸脱する箇所が多い。本発表ではハルトマンが『エーレク』翻案のさいに独自に導入した美德概念と、色の象徴性、馬と人間の容姿の詳細な描写に注目して、ハルトマンの後輩詩人、とくにヴォルフラムに与えた影響を考察したい。第一の点については男女の愛(minne)の対立項としての誠実(triuwe)と、騎士の業に反する誠実(triuwe)と中庸(maze)を分析する。第二・第三の点については、白と赤と黒に含意された思想の多層性を吟味する。

研究発表 (2)

スウィンバーンのグリーン・アイド・モンスター：白い手のイズールト

アイヴァジャン・リリス (慶応義塾大学博士課程)

アルジャーノン・スウィンバーン(Algernon Charles Swinburne 1837-1909)はその生涯に亘ってアーサー王伝説に没頭していた。彼はラファエル前派に属する画家と初の邂逅の後にアーサー王伝説に関する詩作に取り掛かった。しかしながら、スウィンバーンは自らの詩が腑に落ちず、しばらくアーサー王伝説から遠ざかった。1869年に *Tristram of Lyonesse* を書き始め、アーサー王伝説に回帰した。

スウィンバーンの *Tristram* に於いて、最も興味深い登場人物の一人は、白い手のイズールトである。イズールトがトリスタンとの結婚生活で、愛されない女性として苦しみながら生きている様子を、スウィンバーンは事細かに描写している。イズールトの行った劇的独白は、ヴィクトリア朝時代の中作品群の中でも輝かしい一例といえる。

中世と近代の両時代の観点から、スウィンバーンの白い手のイズールトがブリテンのトマ、トマス・マロリー、マシュー・アーノルド等などの前時代のバージョンと比較してどのような変化を遂げているかについて分析する。このような分析を行う事で、スウィンバーンが如何にイズールトを愛らしい若き処女から、自らが愛する人のみならず、恋敵にまで死を齎すような、嫉妬深く複雑な精神を持った人間像にしたのか、その理由を明らかにする。

シンポジウム

「Malory in Japan —日本では近年どのような Malory 研究がなされてきたか—」

司会・構成 高木眞佐子

「エクセターの衝撃—代読されたマッシューズ論文 (1975)」 高宮利行 (慶應義塾大学名誉教授)

「ド・ウォードの重要性を予見していた野口教授」 向井 剛 (四国大学)

「勝利の方程式—ディテールにこだわる戦略」 高木眞佐子 (杏林大学)

「本の声を聴く—Globe 版から 1816 年版の判型特定へ」 不破 有理 (慶應義塾大学)

「翻訳・翻案されるマロリー」 小宮真樹子 (近畿大学)

2019 年は、サー・トマス・マロリーの『アーサー王の死』(1469 年)が完成してから 550 年という節目の年です。そして厨川文夫・厨川圭子共訳の『アーサーの死』(1966 年)が筑摩書房から出版されてからおよそ 50 年でもあります。そこで、本シンポジウムでは日本におけるマロリー研究の過去約 50 年の歩みをふり返り、マロリー研究に貢献してきた日本人研究者の業績を検討し直します。世界で評価された日本人独特の着眼点や研究手法は何であったか、それらがどうして可能となったか、それらは次世代にどう継承されていくべきか等を考えます。